

愛と野望の半世紀

—ある女の自立の歴史—

武笠 俊一・小川 葉子⁽¹⁾

【要旨】

最近の二〇年間に女性研究は様々な領域で大きな進展をしてきたが、こうした女性研究の隆盛の背景には社会科学の大きな変質があると思われる。それは、個性記述的な研究への関心の高まりである。もちろん、法則定立的な研究が依然多くの研究領域で中心にあることに変わりはないが、戦後長いこと等閑視されてきた個性記述的な研究の価値に注目する人々は増加した。生活史研究への関心の高まりも、こうした変化のひとつと考えられる。

生活史研究の領域では女性を対象としたものが比較的多い。しかし、その意義について詳細に検討したものは意外に少ない。本稿では、まず第一章で女性生活史の意義を論じ、第三章で著者たちが高い普遍性をもつと考える一人の女性の語る生活史を提示したい。

第一章 女性生活史の意義

一 個性記述的研究の意義

一九七〇年代は戦後日本の最大の転換期であつたが、社会の変化に対応して社会科学の依拠する基盤もまた大きく変化した。その現れのひとつが、それ以前の「法則定立的科学」から「個性記述的な科学」への比重の移行である。もちろん、一般的・普遍的な法則の発見は科学の基本的な目標でありその意義を否定する研究者はいない。しかし、その一方で、法則定立的な研究の陰にあって長く軽視されてきた「個性記述」に

重点をおく研究が、七〇年代の後半ににわかに脚光を浴び始めた。こうした傾向は、その後下火になることなく今も続いている。

中野卓の提唱により始まった社会学における生活史研究が、当初の同僚研究者たちの予想を裏切って大きな潮流となったのは、こうした社会学における大きな変化があったためである。

中野の生活史の提唱以降になされた生活史研究は極めて多岐にわたっているが、その多くが女性を対象としたものである。こうした研究は、男性を対象とした生活史より以上に庶民の見過ごされたきた生活の実相を明らかにすることに成功したものが少なくない。しかし、こうした事例研究の社会学的な意義を明らかにしようとした理論的な考察は少ない。本稿では、第三章で示す女性生活史の事例を材料にして、こうした研究の意義を示したい。

二 藤井たか子の生活史の意義

本稿の第三章で報告する生活史の話者は、大阪近郊の小さな地方都市で飲食業を営む藤井たか子（仮名）という一人の女性である。彼女は、昭和九年に名古屋に生まれ、子供時代に両親をあいっいで失った。そして、戦後の混乱期を頼るべき人もないまま生き抜いて大人となった人である。

両親との死別、祖母との葛藤、妹への愛と自立への希求、そしてさま

さまざまな男たちとの出会いと別れ。苦難に満ちた青春時代をへて、彼女は最初の結婚をするが、それは長続きしなかった。二人の子供を抱え、彼女は生活のためクラブのホステスとなり、やがて自分の店をもつまでになる。しかし、彼女にはさらに大きな試練がまっていた――。

いわゆる「水商売」の世界に生きる女性の数は多いし、藤井たか子とよく似た生育歴や生活体験を持つ女性も広い世の中には決して少なくないだろう。また、こうした世界に取材した生活史研究もないわけではない。しかし、こうした先行研究の中でも、本稿が取りあげようとする藤井たか子の生活史ほど、こうした女性の生活と意識を生き生きと示しているものはなかったと思われる。以下に、あらかじめ藤井たか子の生活史のもつ意義について述べてみたい。

この生活史調査は、筆者の一人小川が中野卓の『口述の生活史』に触発されて計画したものである。中野が発見した生活史の話者内海松代も、小川が出会った藤井たか子も、ともに極めて恵まれない境遇の中で成長した女性であるが、その人生は春秋の輝きに満ち、彼らの精神は常人の及びがたい高みに達している。すべてを奪われて人生のスタートを切り生きるためにだけ悪戦苦闘してきた人々が、かえって平凡な人生に安住してきた人には容易に手のとどかないような「精神の高み」に達する可能性をもっていたことを、この二人の生活史は示している。こうした稀有な精神の高みは、彼らの生き方のどこに由来するのか――この課題を二人の生活史の比較を手がかりに、考えてみたい。

内海松代は明治二六年に生まれ、明治三〇年代の混乱期に幼年時代を送った。藤井たか子は昭和九年に生まれ、やはり戦中戦後の混乱期に成長した。社会の大きな混乱は、生活基盤のない階層の子供たち、とりわけ女性の生育に深刻な刻印をすることが少なくない。

内海松代の母は気性の激しい人で、子供への愛情が薄かった訳ではないが、再婚した夫との生活を優先した。そのため松代は主にヒイバサンとバァサンの手で育てられたが、その境遇は小学校にも満足に行けないほど恵まれないものだった。藤井たか子は両親を結核でうしない、母方の祖母に引き取られたが、その祖母と寄留先の家族に遠慮しながら、やっとのことで小学校を卒業する。中学に入ると村内の病院に追いやり、住み込みで働きながら学校に通うことになったが、仕事に追われて中学校もほとんど行かずじまいだった。

二人とも、一口で言えば「歓迎されない子供」、つまり自分をもっとも強く依存すべき人に拒絶されて育った子供だった。こうした境遇の中で、彼女たちは幼くして「ひと（肉親）」には頼れない」という意識と強い自立への希求を抱くことになる。

しかし、すべてを剥奪された人間であっても、世間は若い女性を放っておかない。思春期を迎えると、彼女たちはヤクザも含めてさまざまな男たちと出会い、それによって起伏の激しい生活に入ってゆく。その男女関係の変遷は生活史にも詳しくは語られていないが、結婚（同棲）生活に限ってみても、二人の女性の人生の起伏は激しい。松代の最初の結婚相手はヤクザの男、二番目は性的変態の軍人でいずれも長続きせず、三度目に酒造職人と一緒になって、ようやく安定した家庭生活に入るこゝろができた。藤井たか子の最初の結婚相手は良家の「お坊ちゃん」だったが、気弱で一家を支えることができなかった。この夫と離婚した直後に同棲を始めた年上の男は世間知に長けてはいたが、女を食い物にするヤクザだった。そして三度目にであった年下の男によって、彼女はやっと安定した結婚生活を手にいれる。

こうした男女関係や結婚生活は、「世間並み」の人々の生き方とは非

常にかき離れたもののように見え、また道徳的なあるいは本来あるべき生活から逸脱したもののようにながめられやすい。しかし、社会の実状を下層から上層まで均等にながめてみれば、こうした男女関係や家族生活が例外的なものではないことは、冷静な観察者ならば気づくはずである。こうしたきわめて単純の比較だけでも、二人の女性の生活史はきわめて多くの共通点をもっている。このことは、彼らの境遇と生活、世界観が特異なものではなく、高い普遍性を備えたものであることを意味している。

本稿で報告する生活史はたったひとつの事例研究である。しかし、先行するいくつかの生活史と比較することによって、この生活史から、これまであまり学問的世界では注目されることのなかったタイプの女性の生き方と世界観の普遍性を数多く発見することが可能になると思われる。

第二章 課題と調査対象者

一 課題

私（小川）がライフヒストリーを卒論で取り上げたいと思ったのは、ある一冊の本がきっかけであった。中野卓の『口述の生活史』がそれである。

それまで私には、社会学という学問は集団と社会の構造を捉えていくというイメージがあった。だから「個人」そのものを研究のテーマとし、その人本人に自分の人生を語って貰うことで社会そのものを見つめようとする中野の手法には驚くとともに、深い感銘を受けた。また、これまでほとんど注目されることのなかった名もなき「個人」のなかに、これほどまでにさまざまなドラマがあることに今さらながら感服したのであ

る。

社会の中にあつての「個人」。これは当然のことかもしれない。しかし巨大な組織である社会に決して負けない存在感を個人は持っている。そのことを私は本論を書きすすめていく中で確信した。

二 方法および対象者

私は「話者」に次の三つの条件を満たす人を探した。

- ① 六〇歳以上の人であること
- ② 職業を持つ（あるいは職業を持ったことのある）女性であること
- ③ 一般市民であり、かつドラマチックな人生を歩んでいること

①に関しては、単純に年齢の高・低の問題であるが、たとえば三〇歳前後の人を話者に選んだ場合、語られる内容が極端に少ないということになりかねない。また、第二次世界大戦という大きな体験はその当時の人々全てに少なからず影響を与えたと考えられ、それにどう対処していたかという点に興味があったので、なるべく六〇歳以上の人を語り手に選びたかった。

②に関しては、現在のように女性が社会進出できる場がそれほどなかったと思われる時代に、一人の女性がどのようにして職業を得、その女性自身がそのことをどう考えていたかを知りたかったからである。

そのため今回は職業を持った経験のない人は対象外とした。

③について。エリートの一生は型にはめられてい、人生の過程で自らが選び、決断することが少ない。一般市民（＝非エリート）は型にはめられないぶん選択の機会や幅は広がる。しかし選択の自由と引き換えに、

すべての決断の結果は自分自身で受け止めなければならない。

私はすべての決断の結果を自分で背負って生きている人により人間らしさを感じ、興味を覚える。エリートが駄目、というつもりはまったくない。しかし私は、人生の岐路において個人が選択し、決断をする過程をみることによって個人の一生を貫いている「生きることの意義」や主体性を読み取っていきたくと思ったのである。人生の転換期に個人の生への姿勢が強く現れることは、すでに多くの研究者が証明してきたことであるが、その転換期が多ければ多いほど、「個人」に対する考察がしやすいと考えられたため、ドラマチックな（＝転換期の多い）人生を歩んでいる人を話者に選びたかった。

この①②③の条件に合う人として協力していただいたのは、第二次大戦直前に名古屋で生まれ戦後の混乱の中を生き抜いた女性である、藤井たか子氏（昭和九年生れ 満六六歳 大阪市近郊のA市在住 料理屋経営 以下敬称略）である。彼女の現在のお仕事柄、またご本人の迷惑になることを避けるため、インタビュー中の地名、人名はすべて仮名にした。よって図表1の「親族ネットワーク」も本論のための付録であるに過ぎない。

インタビューは平成一二年の八月三十一日から一月七日までの合計八回にわたり藤井さんのお仕事の合間を縫っておこなった。多忙であるにもかかわらずその都度快よくインタビューに応じてくださったことを心より感謝したい。

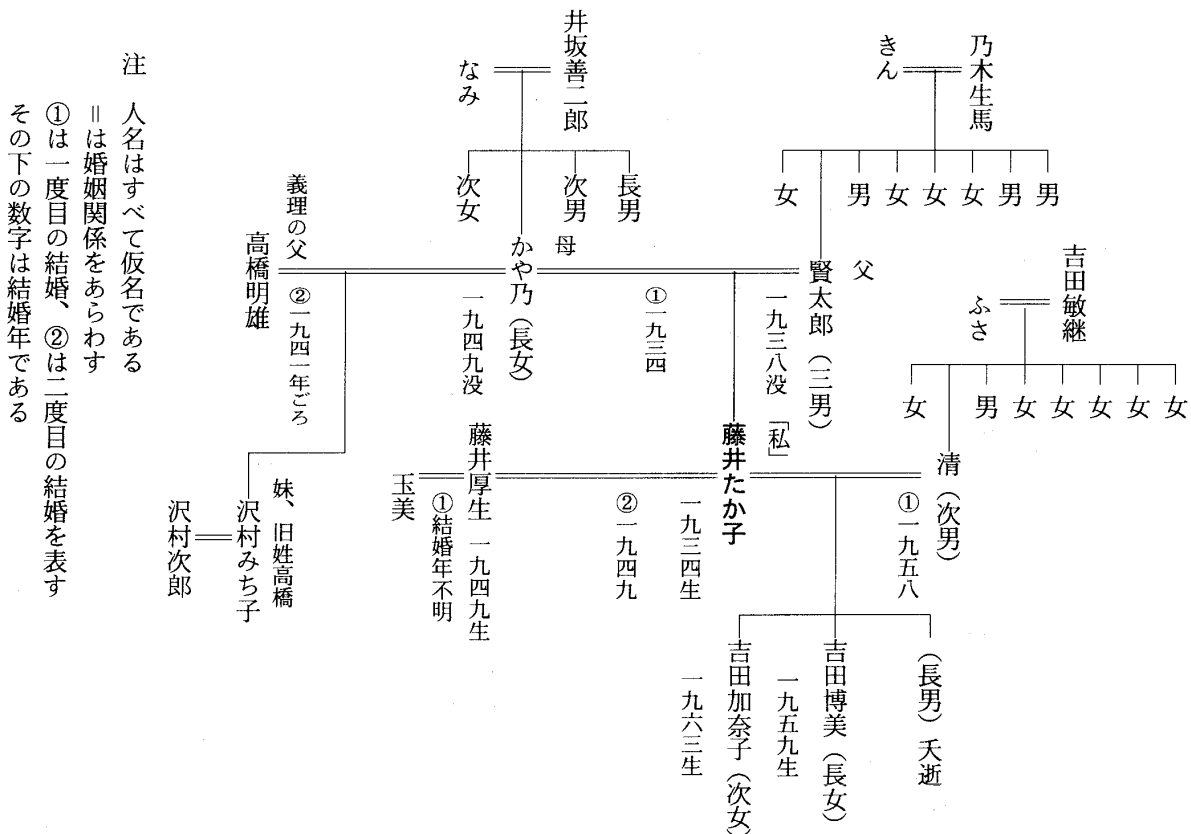


図-1 藤井たか子の親族ネットワーク

第三章 戦後日本を生きたある女性の生活史

① 「アトトリ娘」として生まれて（一九三四〜四三年）

（私＝藤井たか子は）一九三四年四月二八日に名古屋で生まれたの。小学校（に）はいる前、だから五つぐらいで、お父さんがなくなったの。昔の五つって言ったら今の満四歳。

父の名前は乃木賢太郎。国体の選手でね。私は跡取娘（長女）として生まれて。その当時お手伝いさんが五人くらいいるような家に生まれてんの。（あまり言いたくないんだけど、父は）ある歴史上の人物の末裔。今は生まれた家とは何にも（付き合いない）。お母さんがあたしを連れて出ちゃって再婚したから、生まれた家のことは一切わからない。

私が小学校一年生のときに母が（婚家を）出ちゃってね、つらくて。それはお姑さんとの折り合いが悪かったからなんだけど。私が（母の）おなかに入っていたころから言わんならんけど、もともと（父と母は）できちゃった結婚。私の母は富山で生まれ、父がその名古屋のお坊ちゃんだったの。父の職業はなし（笑）。おじいちゃんが資産家だったから道楽息子。そしてもう、その遊ぶといったら（大変なものだった）。ビリヤード（の遊技場）で、母（かや乃）が点取り嬢をしたの。「何点——！（入りました）」って（言っていた店の）隅っこでね、そこでロマンが生まれたの。だもんで月（父）とすっぽん（母）の結婚をしたの。両親の反対はもろんあったけど、その当時墮ろすってことはできないでしょ。私の大変さはそこから始まったの（笑）。おなかへ入ったときから（笑）。

父は国体の水泳の選手だったんだけど結核で死んだの。肋膜炎がたまって。水泳選手ってのは飛び込んだりしたとき胸を打つもんだから肋

膜炎に水がたまる。それから肺結核になったの。そして母は父が死んだ後（婚家にいるのが）つらくて出たんだ。母はお花を習いに行ってたんだけど、ある日「（私に）今日は遅くなるから先に寝てなさい」って言うて出かけたまま、帰ってこなかった。

それで私は一年くらい乃木家で育てられた。その間母は（賢太郎が亡くなった後にできた）彼氏と名古屋の中村区で住んでたの。だけど一年の一学期に母が私を迎えに来てくれて、私も中村区の家へ引っ越したんだわ。「何もいりませんから子供だけください、嫁入り道具も皆置いていきます」って。私は知らなかったんだけど、何度も何度も母は乃木家に私を返して欲しいって来てたみたい。その時（乃木家を出た時）のことをよく覚えてるんだけど、乃木のおばあさん（きん）と松坂屋（名古屋のデパート）に行つてご飯を食べたの。食べ終わった時に、「これがあんたにしてやれる最後（のこと）だから」って言われた。

それでしばらくは母と義理のお父さん（高橋明雄）と暮らしたわ。二人が楽しそうに日用品を買ってたことを覚えてる。それからいくらもたないうちに妹（みち子）が生まれたんだけど、その直後に母が発病したの。お父さん（乃木賢太郎）の結核がうつってたんだね。「子供と命、引き換えになるヨ」って言われたけどそれを承知で（妹を）産んじやったの。

産んですぐ疎開と転地療養を兼ねて、母とみち子は母の実家（富山県黒部市）へ帰ることになるのね（母と義父・明雄の同居生活は二年に満たない短いものだった）。だからしばらく私は義父と二人で住んでた時があるのね。そのうち戦争が激しくなつて、義父は召集されていったから、私も母の実家へ行ったの。これが九歳のとき。

名古屋のお嫁入りって大変でしょう。そこへもってきて月とすっぽん

の結婚だから、（母の実家は）財産投げうってお嫁に出さなならんようになったの。お母さんの実家はちょっとした船持ってた漁師だったんだけど、その船を売らないと母をお嫁にやれなかったの。だから私がオバアチャンとここで最後までつらい思いをするの。なんのためにうちの財産投げうってまで嫁にやったんだ、ということになるわけ。

② 「おしん」のように（一九四三〜四九年）

母を病院に入れようとしたけど、その当時そんなに病院があるわけじゃなし、病院におったってお金かかるだけで（まだ結核の特効薬はなかったから）ただ隔離されるだけでしょう。だから藁をもつかむ思いで、金沢のお灸のお医者さんに行ったの。お灸が効くっていうんで、一日二回してもらったの。背中全部もう、碁盤の目みたいになって。上向いて寝られなかったヨ、お母さん。ガーゼの襦袢着てね。普通のしもた屋さんの二階でちょっと大きいお家で、一部屋に三人ずつくらい自炊しながら（生活していた）。だから療養所みたいなとこかな。

それで八つ違いの妹を抱えて、私が妹を育てていく羽目になるのね。食べさすのはオバアチャンでも（笑）。戦争が終わってからが大変だったんだよね、食べる物は。戦中も大変だったけど、（戦争が終わったら）何もかもがなくなっちゃったんだから。主食がお芋とかぼちゃとジャガイモ、そしてお味噌汁。お味噌汁が食べれたら最高。

で、学校ではお味噌汁が給食なんだけど、おうちから野菜持ってきたかな。いかん。「あんたんちは里芋、あんたんちは大根」っていうふうにして、みんなで持ち合わせて（食事をした）。煮干なんて誰も提供してくれないから、イナゴ採るの、秋に。学校の宿題がイナゴ一〇〇〇匹採ることだった（笑）。イナゴを採って学校へ持っていくと、小使いさんがお湯グラグラ炊いてんの。そこへぱーっと（イナゴを）空けてくの。そのイ

ナゴがダシなの、お味噌汁の。最初は食べれたもんじゃない、「わア、足があるウ——！、頭があるウ——！」って（笑）。でも足のギザギザのとこ、あれが一番美味しいんだよね。今は珍味として売ってるけど。

それでそうこうしてる間に召集されてた二番目のお父さん（義父明雄。これ以降のインタビューに出てくる「お父さん」は全て明雄のことである）が南方（ニコバル）から帰ってきたの。帰ってきて間もなくお母さん亡くなっちゃったの。私が中学一年（中学三年の誤り）の時。

（毎日が食べていくのに必死だから）オバアチャンは妹が邪魔なの。畑仕事ができなくて。だもんでね、（私が）妹連れて学校行くようになった。連れてかないと、（小学校を）休めって言うの。私は学校が楽しいから休むのがつらい。それで連れて行くんですよね、妹を。私の席の横に妹を座らせた。ところがねエ、ちようどそろばんを習うとこだったから、指の使い方習うのに、みんなシーンとしてるでしょ。そんな時に、「お姉ちゃん、おしっこ」、「お水」（という風に、しよっちゅう中断させられた）。だから私そろばんできなかったもん。つらい思いしたねエ。だから私ね、後で自分でお商売する時なんかね、一本指でそろばん速かったヨ。計算機長いこと買わなんだもん。

だから、オバアチャンがなぜ「妹を連れて学校行け、でなかったら休め」っていったかというのと、もともともう少し裕福な家だったのに、私の母をお嫁に出すためにほかの兄弟に無理させてるわけ。（母は）おじさんが二人、おばさんが一人の四人キョーダイだったから。このおじさんのお嫁さんがすでに（家に）来てたの。このお嫁さんに悪いって言う気持ちがあるの、オバアチャンには。物のない時に三人も厄介になって、一人は病院に行かならんから稼ぎが何もないわけでしょう。だからつらく当たれるのは私しかないわけヨ。そしてお祭りがあってもいい着

物着て遊びにいけるのは叔母なの。私はつらく当たられたけれど、(結果的に)一人でも生きていけるように教育されたわけだよ。これでもか、これでもかって。

「おしん」っていう映画知ってる? (私の苦労は) あんなもんじゃないよ。こんなンがなんで映画になるのって思ったよ。こんなの当たり前やンって。夏休み冬休みは絶対に親戚へ子守りにやらされる。子守りしながら掃除する、ご飯炊く。馬のくつわ持たされる。それをする、ひと夏ならひと夏が過ぎるとお米とお餅が(親戚から)ドーンと来るの。そうすると私ら姉妹とお母さんが遠慮なく食べれるの。

そうこうしてるうちに、オバアチャンが働きに行きなって言ったの。

中学の同級生のところがお医者さんだったの、村でたった一軒の。そこへ看護婦として行っておいでって。それで働きながら行ける日は学校行かせてくれるって。それで校長先生も納得したの(義務教育は受けなければならぬし、その一方で働かなければ生きていけないという状況が、解決するから)。ところが実際は(学校へ)行けないよ、忙しいもん。行けたのは月二、三回くらい。でも中学の計らいで卒業証書はくれたよ。だから私ね、ローマ字は大人になってから覚えた。悔しかったね。小学校の修学旅行も子守りにいって行けなかったのも悔しかった。友達がお土産買ってきてくれたのね、お人形さん。「ありがとう」って言って貰ったけど、ぶん投げた。悔しかったね。同情はして欲しくなかった。今も(その時のことを思うと)涙が出る。

中一の時から看護婦(の見習い)として働きにいったんだけど、その先生がものすごく大事にしてくれはって、いつも先生のかばん持ちやっていた。そんな病院を何で辞めなきゃならなかったかって言ったら、奥さんのヤキモチ。その当時三年間病院で勤めてたら看護婦の国家試験が

受けられたの。それでちょうど試験が明日っていう時に奥さんにつらいこと言われて。それでオバアチャンとこへ帰って、「もう私いたたまれない」って話をしたところを(奥さんに)立ち聞きされてたの。そしてら病院へはもどれないでしよ。

先生がレントゲンのやり方もみんな教えてくれたんだけど、教えるには暗室の中へ入らなきゃならない。そうすると奥さんが「いつまでそんな暗いとこへ二人でいるのよ——」って。何かにつけてネチネチ言われた。もう、それはいたたまれななんだ。多分もう一人の看護婦さんが、先生が私ばかりをかばん持ちにするもんだから嫉妬して、奥さんにあることないこと告げ口したんだと思う。

それでその当時ね、今でも妹と話すんだけど「お姉さんは朝私が病院の前を通るとくすりを渡す窓口のところで待っててくれたね」って。私が表を掃除して、妹が登校するその時間しか会えなかったもん。それが最高にうれしい時間だったネ。妹が言うよ。「お姉さんいつもあそこで待っててくれたもんね」って。だって妹と会えるのは朝だけだったもの。で、元気な姿見て「いってらっしゃい」って……。

そしてねえ、はっきりと覚えてないけどちょうどその頃だったかな、高岡(富山県高岡市)に博覧会が来て、私一生懸命お金貯めて、妹の服と私の服をおそろいで買って、連れてったのよね、博覧会に。後にも先にも博覧会に行ったのはその一回だけ。何を見たのかもう覚えてないんだけど、覚えてるのは帰りに「青い山脈」(の音楽)が流れてたこと。ただでさえ早く帰らなきゃならないのにその映画も見て。怒られたけどね、帰ってから。でも私にはいい思い出だった。で、妹には木琴とバレエボールを買ってあげて。値段は高かったけど、妹はそれですごく鼻が高かったンだって。だって二四色の色鉛筆が買ってもらえなくて自殺を図っ

た妹だもん（私は妹が不憫だった）。私は自分のところに呼ぶまで、（約一〇年間）ずうっと妹に仕送りしてたよ。

病院を辞めて（昭和三年）から、大聖寺（金沢市近郊）にある紡績工場に看護婦の口が空いてるって言うので行っただの。その工場に行っただぐくらいに、地震にあつてあれこれしてる間にわたしが歳をごまかして働いてるのがバレちゃって否応なしに戻された（解雇された）。帰ってきたら、オバァチャン怒るわね、看護婦は駄目、紡績行つては帰される。そりゃ歳が足らんのだから帰されるんだけど、オバァチャンは自分だけの法律でモノ言ってる人だから（笑）。それで私はもうここにはいられないからってことで、お父さん（高橋明雄）を頼って神戸へ行っただの。

③ 放浪時代（一九四九〜五八年）

私は看護の経験もあるし、勉強して看護婦になろうと思って芦屋の看護学校へ入るために紹介状をもつて行っただの。そしたら運の悪いことに廃校になってた。そしたらその日から私は泊まるところがない。それでお父さんが神戸にいたから、そこへ頼って行っただの。お父さんは（会社の）独身寮にいたの。そしたら何のために来たンやって言われた。確かに血はつながってないけど、すごい拒絶の仕方やった。初めて神戸へ出てきて心細い時にこの仕打ちやろ。もう、死んだら思つて。神戸港で入水自殺しようと思つたんだけど、水面を見たらすぐ汚くて。年頃やから汚い水の中で死んだ自分の顔を想像してしまつて……死ぬのやめた（笑）。あとから考えたらお父さんに対するあてつけで自殺を考えたンやろうと思つた。でもその時に、誰にも頼れないンだから死んだつもりで頑張ろうと思つたね。一人で生きていけるようになって。

それで生きてくためには、その日から泊まるところと就職先を探さな

ならん。当時どういふところが一番就職口があつたかというところ、喫茶店で、喫茶店で住み込んで働いてたのがこの震災（阪神大震災）でグチャグチャになった長田の隣のイタヤド（神戸市板宿）ってところ。賑やかなく所だった。一日中音楽がかつた。戦後復興するのに皆目を輝かして働いてたわ。だけど、この時街がヤクザだらけだったのね。当時はヤクザとは呼ばずに愚連隊って言つてたね。この愚連隊ってのは（言葉の元の意味は）ヤクザになろうつてなつたんじゃないかって、特攻隊の生き残りの人。そういう人たちは戦友が皆死んでしまったのに一人生き残つてしまつて、気持ちのもつて行き場がなくて暴れてる人。そうかと思うと親が死んでしまつて急に大学いけなくなつて荒れてる人やいろんな人がいた。こういう人たちがグチャグチャになつてカツアゲ（恐喝）したり、少数の裕福な人から（金品を）巻き上げたり。この人たちが今の山口組のもと。オカマの発祥地も神戸だし（？）。三宮のガード下行つたらもうオカマだらけ。

（イタヤドは）いろんな人がグチャグチャになつて住んでたから、お金持ちも貧乏人も、かえつて住みやすいのよ。山の手（お金持ちが住んでるところ）に貧乏人は行かなきゃいいンだから。だからガードからちょっとでも山のほうに住んでると「あたし、山の手よ」って（自慢顔をする）。それで（逆にイタヤドで）女の子がバスを待つのに立ってたら「ヘイ、カモン」ってピュッと（進駐軍に）腕組まれる。女の子が立ってたらみんなパン助（街娼）と思われるのね。

イタヤドにいた時に愚連隊の親分に目をつけられて、自分の女にするのせんのって話が出たンやけど、私があまりにも幼い。純真やつてんね、中身が。そのころ一五、六かな。だけどおしゃまやから、パツと見たところは大人っぽいね。そらもう大人の世界に入つとンやもん、早ヨ

から。だから中間がないの私、子供からすぐ大人（になった）。

それで喫茶店での仕事が終わって銭湯に行く時や街を歩く時なンか、常に私の後ろに五、六人の男の人たちがいるのね。ガーッと来るわけじゃないし、なンか知らんけど雰囲気を変なのね。変な人たちだなァと思いながら、ある日銭湯から上がってきたら、帰り道の電信柱ごとに一人ずつ人がいるの。で、三番目ぐらいの電信柱からコロンと音がして、何かが持ってた風呂桶の中に投げ入れられた。でも暗くてその時は何が入ってるかわからなかった。それで自分の部屋へ帰ってみたら紙に石ころが包んであって、広げてみたら「君は今の自分の状態がどうなっているかわかってますか」って。「親分があなたを狙ってます。もしそれが自分にとって危険だと思うなら、早くこの町から出て行きなさい」って書いてあったの。親分の手下の人が教えてくれたのね。

さァ、どうやって（イタヤドを）出るかっていうのが問題になって、まずお父さんに連絡したの。そうしたらお父さんは、そりゃ大変だったことで、手助けしてくれて逃げたんだけど、もういたるところにその人の手下がいるわけね。だから暗い所暗い所を選んで逃げてこなあかん。お父さんもそんなに地理を知ってるわけじゃないし。だから今思うと山の方へ行ったら永田町の方を通過してンやろうね。そうして三宮まで出てきて、その近くの大きな喫茶店で働き始めたの。お父さんが頼んでくれたのか、自分で行ったのか（働くようになったきっかけは）覚えてないけど。

そこで働いて一週間でももの見事に愚連隊の奴らにばれたわ。もう（探索の）網が張り巡らされてたのね。それでね、その間お父さんが二回ばかり（私の給料の）前借に來たでね、そこにも何ヶ月もおられへんかったとちゃうかな。（そこにいたのが）長かったのか短かったのか自

分でもわからんねん。お父さんが、彼女がいてお金が要るって言ってお金を取りに来るから「お父さん、私とは義理の親子であっても、富山に実の子供（みち子）が一人おるンやから私にお金借りに來ないで。（稼いで）メリヤスのシャツのひとつも送ってやってほしい」って言ったことあるもん。私は放つといってくれたらいい、早く妹呼べるように、そのために私もここに来て（働いて）ンだからって。って言っても今思うとお父さんもみち子に仕送りできなくて無理ないわ、若いもん。そりゃァ女の人欲しいやん。でもその当時はそんなこと思えへん。で、結局お金がかかるもんだから私のところに借りに來て。おそろくデートするにしてもエエかつかせならんし。

で、そうこうするうちに「以前メモを投げ入れたのは僕なんです」って尋ねてきた人がいたの。神戸の駅長さんの息子で、神大（神戸大学）に入ってたけどお兄さんが愚連隊に殺されて。それで大学中退して「これからは強い者勝ち（の世の中）なら、俺も」って愚連隊に入って、手下になってる人だったのね。でも正義感の強い人だから私に忠告してくれたんだけど、親分が「何でこの町からあの子（たか子）が出てった？」って皆を問い詰めるから（誰が逃がしたか）分かるよね。で、結局その人は神戸におれなくなつたもんで、大阪（の近郊）のI市にある自衛隊に入るからっていうのでI市に行く前に私のところへ尋ねてきたの。それで初めて顔見たの。あァ、こんな人やったンかって。で、ありがうございましたって言って。

それでしばらくその喫茶店におつたんだけど、毎日のように変なの（愚連隊）が来るの。四、五人でコーヒー飲んでンやけど、目は私の方ばかり見てるの。だからって私にイヤなこと言うわけじゃなし、ただ見張ってるだけ。

それで（三宮で働きはじめて）三ヶ月くらいたってから、I市の自衛隊の「偉いさん」が私を訪ねてきたの。勲章いっぱい付けた人がね、その男の人（メモを入れた人）の苗字をゆうて「知ってますか」って。「はい、知ってます」ってゆうたら、その人が「訳があつて自分はそっちへは来れないけど、あなたに教えるだけ教えて自分は身を隠したことがものすごく気になってる」って。「もし僕があなたに忠告した事であなたの立場が悪くなつてたら気の毒やから、この町を出る気があるのならこっちへ来ませんか」って。そう、その人（自衛隊の偉い人）に言付けたきたの。

それで向こうの様子も分からないし、とりあえず見に行ったの、その偉いさんに連れてって貰って。それで様子も分かったし、戻ってきてしばらくは喫茶店におったんだけど、相変わらずお父さんお金取りに来るし。それでも、このお父さんから離れなならんと思って、I市に行く決心をして店の人に「やめさせてください」って言ったら「アカン」って言われた。「お父さんの承諾を得なアカン」て。（たか子のことで）チンピラ達（愚連隊）に喫茶店の人がようけ責められてたんだと思うわ、その時。

とにかく私がもうそこにおれんようになってきたンやで、危ないってことで。オーバーにハイヒールにバッグだけの姿のままI市に来たの。着の身着のまま。したら、お父さん追っかけてきたの。連絡したみたいでさア、喫茶店の人が。お父さんがその（私の乗った）列車に飛び乗ってきたもん。それで私列車の中で追いまくられて、殴られて。それで私I市の駅に降りた時に「警察どこですか——」って走ったもん。神戸からI市までの間列車の中をグルグル逃げ回ってたんだもん。

後でわかったんだけど、（私のことで）ハナシがヤクザとお父さんと

の間でできとった。お金もらってたの、お父さん。だから、それっきりお父さんとは縁がぶち切れてるの。とにかく警察行って、その時の当直の刑事さんがやがては親代わりになったン、私の。だって知らんところで働くのに身元引受人がおらんもん。「名前だけの親でそんなにいいじめとンのやったら、わしが親になったる」って（かって出てくれた）。

その後私がI市で働いてる時にお父さんが何べんも来とったンやわ。来ては「帰ろ、帰ろ」って。それで私が「帰ろう」って気持ちになったのは、（義父が）どういう理由つけてきたかって言うと、妹引き取って今神戸と一緒にいるって。それで妹が肺炎になつてすごい高熱でうなされて「お姉ちゃん、お姉ちゃん」って言うてるで来てやってってくれて。なんとしてでも連れてこうとする。（今から考えたら）そら、愚連隊（ヤクザ）からお金もらってるモン、なんとしてでも連れてこうとする。

で、最後の決着がつくのがそこなンやけど、刑事さんに連絡して「こんな理由で（お父さんが）来てる」って（相談した）。そしたら、そこはなんという病院か診断書見せてもらえって言われた。そうしてそれをお父さんに言ったら、わざわざ診断書もらってきた。「ほら見てみイ」って。そしたら私は信じるヤン？ でもさすがは警察やナ、私があの時とどまってよかったなと思うのは、もうお父さん死んだから言えるンやけど、刑事さんが警察電話でパツと調べたん、そのお医者さんに電話して。長いこと「うん」って言わなならしいけど、（最後に）頼まれて偽の診断書書いたって言ったもん。それでもうお父さんとは親子の縁切った。

当時その刑事さんの従兄妹さんがI市でバーをやつとって、私はそこへお預けの身になった、その人の監視のもとに。そこに三年おったわ。その時すでに今でいう、チーママやったわ。お料理も皆私がするンやもんね。バーやけど、食べ物やったほうが儲かるの。自衛隊さんが皆（駐

屯地から）外へ出てくるでしょう、うちのバーは帰りにお持ち帰りできるの。すると、チャーハン作っというとか焼きそば作っというとか（注文される）。帰りは門限があるからそれまでに作って折り詰めにして。

そのバーが面白いお店でね、右半分がバー、左半分がお寿司なんかのお料理ができたの。お寿司のカウンターみたいのがあって、私そこでお寿司握ってたもの。その時に少しの間板前さんを入れてたから、そこで私しっかり料理を教えてもらったの。そのうち私が料理を何でもこなすようになっちゃって、その板前さん辞めさせられちゃったの。たった三ヶ月で。だってお店にしてみたら（私がいれば板前さんに）高い給料払わなくていいんだもん。

そのバーは（隣のN市にある）県庁の人たちもたくさん飲みに来て、「私こういう仕事嫌なンや、まっとうな昼の仕事がしたい」って言うたら「昼、保健所へ来い」って言われて。普通なら許されへん（正規の採用手続きが必要）。だから昼保健所で働いて、夜はバーで働いてた。ほら、私看護婦の経験あるから、保健所の試験室におった。

そうやって私が一九の時に県庁の建築課にいた人（吉田清）と知り合ったの。その人と知り合う前にあの愚連隊から自衛隊に入った人に、結婚しようって言われてたんだけど、お酒が入ると暴れる癖があんねん、やっぱ。（愚連隊にいた頃の）癖が出るの。あと、麻雀が好き。だから、私「そういう人とは一緒になれません」って言ったの。

それで吉田と付き合い始めてバーを辞めたんだけど、一緒になるまでが大変やった。私結婚ってことを考えてなかった。あまり結婚ってものに希望がなかった、まァお母さんのアレも見てるしね、それよりも自分で事業がしたかったから。だから結婚するのに五年もかかったんだ。それでも私は一緒になる気はなかったんだけど、むこうのお舅さんがたい

がい一緒になったってわかって言われたから一緒になっただけで。

結局知事さんが交代された時に、（私は臨時職員だったから、保健所を）辞めて。知事さんが変わる時には何かと（人事の）異動があるでしょ、それでごちゃごちゃするンなら辞めます言ウて。私はね、とにかくその間でも妹に仕送りしてたから（仕事がないと困る）。朝はヤクルトの配達、昼は「男子専科」（L市にあった男物の衣料品専門店）で働いて、これが七時から一九時まで。それが終わったら今度は二〇時からダンスホールでアルバイトなのよ。だからご飯食べる時間ってのはその次のアルバイトへ行く移動時間だけだった。コッペパン齧りながら移動したよ。ダンスホールは二二時で終わるのね、ところが二二時三分の汽車に乗り遅れたら帰れない。（終電は）L市止め。L市からI市までどんだけ歩いたか（L市からI市まで徒歩三時間かかる）。家に着いたらもう、一時間も寝る暇ないうちにヤクルト配達だもん。一〇〇件くらい配ったなア。

でも体は壊さなかったよ。お医者さん行ったことないもん。こういう体にオバァチャンがしてくれてんもん。鍛えぬいたんだもん、あの人が。そして自分で間借りしてそこで自炊。その自炊もガスじゃないわね、七輪。七輪でご飯炊いて食べて、そして仕事に出てくんだもん。寝る時間あらへん。せやもんで、ウエストがブカブカやったね。それでもって夜ダンスホールでお客さんの相手して、ジルバからワルツからタンゴから踊るわけやから、そら動きっぱなしやわ。だから未だに立つとる仕事に向いてんのやろうね。

ダンスホールでは、お客さんがチケットを渡してくれると、そのお客さんのお相手をして踊るの。このチケットが金券代わりやね。その代わりこっちはプロやから誰にでも、たとえば極端な話が、びっこの人にあ

たったら同じようにびっこを引いてあげな踊れへん（自分もびっこを引きながら踊る）。そしたら嬉しいわナ、足の悪い人は。これがやがて私がクラブに勤め出した時に役に立ってるね。誰の相手もできることが。当時は生バンドも入ってたし広かったからそりゃ賑やかだったね。

それが二時に終わるときあ、ドレス脱いで「おつかれさまア——！」って走るンやけど、三分で駅までなんてよっぽど（仕事）暇じゃないと無理よ。急いで駅まで行ったら列車が出てしまっていて「あア、また今日も歩きや……」って（ことが多かった）。それで「男子専科」は辞めて、ポーラ（化粧品）の訪問販売に切り替えたの、昼はね。もっとお金稼げるんじゃないかって。だからヤクルトを（も）辞めて化粧品販売一本でやったらもっとお金稼げるんじゃないかって。ちょっとでも寝たいでしょ。化粧品のほうでがんばったら儲かると思ったんだけど、自分で全部（商品を）買い取らなアカン。それで、歩いて訪問するんだからね。一日一〇〇軒くらいは訪問したネエ。行けども行けども買ってもらえない、私もう（訪問販売の仕事）合わないと思ふかなア思いながら、もう後一軒行ってだめならもう辞めようと思つて入ったお店でワッセンセット売れたの。これで続けることにした（笑）。

けどその頃押し売りによく間違えられたよ。だから断られンようにするために一生懸命考えたね。足突っ込めって言われたね、ドアに。（でも）あれはできないワ、化粧品売るのに夢が壊れるわ、アレは。男の人たち（販売員）はそうするって言ってたけどね。

④ 「お坊っちゃん」との結婚（一九五八〜六六年）

それでそんな生活ずうっと続けてて、その間に吉田のおばあちゃん（義母）が亡くなって、その翌年に吉田さんの妹が自殺して。働きなが

らも私その家（吉田家はタバコ屋を営んでいた）を手伝ってたからね。おじいさんとおばあさんと妹さんと吉田さんと四人暮らしだったのに二人になっちゃったでしょう。女手はなくなるし。それでマア、結婚を急がれたようなもんだね。結婚と同時に吉田の実家のN県へ移るんだ。

吉田のおじいさん（義父）は私のことをよく理解してくれて、私の今までの話をするに「あんたの中には苦労してきた暗さがまったくない、よくグレなかったね」って言われたよ。そこをおじいさんに見込まれたんだろ。今思えば、妹に仕送りせなならなかったことが私をグレさせなかったんだと思う。毎月決まった額のお金を送るわけじゃなかったけど、それこそ寝る間も惜しんで働いてたんだもの。だけど「あア、今月はこれだけしか送られん」って時もあったわ。お金だけじゃなくて本や服も送ってた。今でも妹はそれが一番の楽しみだったって言うわ。だってそれが私と妹との唯一のつながりだったもの。

いまだに夢に見るのが、私が（一五歳の時、看護学校に入るために）富山の魚津駅から神戸へ汽車でたつ時のこと。妹と別れる時の辛さがすごく印象に残ってるンやろ。子供は私の懐におるから護ってやれるけど、妹はそうじゃないから。

それで結婚してすぐ、妹を引き取りたいって言ったらおじいちゃんは一も二もなく呼びなさいって言ってくれたわ。それで春、妹の中学校卒業と同時に呼び寄せたの。

だから妹はね、（妹の）旦那さんが私の悪口言ったらすごいヨ、離婚するって言うよ。今は旦那さんは私の悪口言わないけど（昔は言われた）。何でかって言ったら、私は「女の癖に偉そう」やって。私がサ、吉田と離婚してやがては自分で店やりたいって言った時にね、「義姉さん、大の男でも商売やるっていったら大変なのに子供二人抱えて商売するなん

てなんちゅう考えや。あんないいお義兄さん捨てていくなんて」って。でも私が「子供に責任を果たせない人はいい人とはいえない。こっちは生活かかってるんだから」って言う。「小賢しい女だ。そんなんだから別れなならンようになるんだ」っていうことを、さんざん言われた。今はそういうことは言わないけどね。

で、一緒になってすぐに今度はおじいさん（義父）が倒れて、しばらくして亡くなったの。続いたね、三人。

結婚と同時に妹を富山から呼んで、しばらく一緒に暮らした。その後妹は美容院で住み込みで働くようになるんだ。それでそうこうしてる内に、結婚して一年目に最初の子（博美）が生まれたの。それが（私が）二五歳の時。博美が生まれる前に男の子が三日生きて死んだ、まだ籍入れてない時に。（訪問販売で）自転車にばっか乗ってたから弱いよね。博美を産みに行くのも自転車で行ったもん。自転車で「先生、一週間遅れてます」って行ったら、「あかんで、あんた今晚やで」って。

タバコ屋へ嫁いでもンやから店番はせにゃならんし、今日入院なのにご飯の支度も洗濯もして行ったね。それでもう五日目に退院してくるンやもの、臍の緒が取れたらすぐ。でもそれが当たり前やと思っとったね。だって周りに助ける人がおらんたら、それが当たり前やと思うやん。だから私は可愛くなかったん。「私できなあい」つつうのがない（笑）。

主人はおじいさんがおる間はいい人やったけど、おじいさんが死んだらもともとの怠け癖が出てきた。ぼっちゃんやもん。というの、おじいさん（吉田の父）は元銀行員でそれなりの地位のあった人だ。

主人は八人兄弟の実質末っ子だから、もうお人形さん扱い。おばあさん（吉田の母）もすぐきっちりした人だね。そういうしっかりした家の末っ子は駄目になる。依頼心が強い。全部周りの人がしてくれたから。

主人がまた顔からしてお坊っちゃんやったからね。「お坊っちゃん」がまた好きだった、私。昔（名古屋にいた頃）は、お坊っちゃん・お嬢ちゃんの中に育ってるけど今の自分の境遇はそうじゃないわけでしょう、だからそういうもんは憧れるンやなァ、と思う。裏返しやろうね。（それだけののに）私が甘えさせてくれると向こうが勝手に思っとるかもわからんな（笑）。だけど勝手に主人が甘えて働かんのならその足らん分を私が働いたる、と思っちゃうから（うまく行かなかった）。

私は主人と一緒にいる時に、この人と一緒になったらいずれ別れるなァと思ってたもん。この人付き合ってる時はいい人だけど、一緒になったらいずれ別れるやろうナと思いつながら一緒になった。そんなんで一緒になるほうが馬鹿やけどね。でももう、情ってものが（五年も付き合ったら）出てくる。あと、おじいさんたちとも仲良くしてるし、で。

結婚してからはタバコ屋を引き継いでやってた。タバコ屋をしながら、どうせ座ってるンやで、内職の幹旋業をやりだしたの。店を利用して。

それが三年ぐらいして、軌道に乗り出して。その内職っていうのがアイスクリームのカップのフタを貼る仕事なの。何人もの女工さん使って、わりと順調に行ってたの。そしたらそのうち、だんだんと主人が働きに行かなくなってきたの。私が忙しくなるのとは反比例して。それでそうこうしてるうちに、これではあかんやァって思ったもんで、こんだけ内職のほうで忙しいンやたらこちを本職にしたらどうかかって思ったの。それで私は大阪の本社へ行って交渉して、オートメーションの機械で一貫してうちでやったらどのくらいの収入になるか聞いてきて。それで親戚の土地を借りて古材で工場を建てて、女工さんを一四、五人おいでやりだしたの。

それで、これから、さァ軌道に乗るかかっていう時に、主人が県庁を辞

めたのね。それで朝の一〇時ごろに起きてくる訳だから、誰も主人を「社長さん」って呼ばないわね。

そのうちに、役所のほうから蛍光染料入りのカップは駄目って言われたの。それでたくさん仕入れてあった材料が全部パアになってしまった。ちょうど時期が悪かったけど、それも運命なんでしょうな。さあ、これからって時だったから、糊にしても何（材料）にしてもどんと仕入れてあったわけ。役所がしばらくはええって言っても業者が受け取らなくなるわな。もうすぐ駄目になるものは受けとらへん。結局工場やってたのは一三年位かなア。

この間に下の娘（加奈子）が四年違いで生まれてるから……。何もかも同時進行やから（タバコ屋と工場以外にも化粧品や宝くじの販売もしていた）、正確な年数はよくわからない。

そのうちぶらぶら遊んどる主人を叱咤激励して材木屋に働きに行かせて。だけどやっぱり主人はよく休むの。いつ辞めさせられるかわからないような働きぶりなの。だけどその収入だけで暮らしていくのは大変でしょう、この頃タバコ屋も辞めたし。

店（タバコ屋）を辞めてからどんどん没落しちゃって、それこそ八百屋さんでお通い（ツケ払い）だもんね。もう、私に対する信用だけで品物を売って貰って、お給料入ったらすぐにツケを払って。小さい頃（名古屋にいた頃）のお通いは家が裕福でさしてもらってたけれど、八百屋のお通いはお金がなくてお通い（笑）。だからお肉が買えない。ちくわとかはんぺんとか、八百屋で買えるお肉しか。そういうものを肉の代わりにして子供達育てたよ。だからネ、子供たちが、「お母ちゃん、岡田屋（今のジャスコ）で買い物しようよ」って言ったって現金がないもんだから入れない。辛い思いしたねエ。でもほんとに貧乏だったから子供

の遊び道具やご飯もいろんな工夫した。

今でもたまに作るんだけど、「ずるずる」って呼んでる料理があるの。芽の出た野菜やソーセージやはんぺんを何でも入れて、麺をカラ炒りにして、今でいうあんかけ焼きそばみたいなもの。そうすると子供たち喜んで汁ごと食べたよ。未だに家族は皆これが好きよ。貧乏は苦しいけど心を豊かにすると思う。ちょっとお金が出てくると（余裕があると）、皆でんでんばらばらになって、食事にしなって「私今日、どこどこで食べてくる」ってなるでしょう。だから貧乏って宝やに。

主人がそんなだから私もバイトせにゃいかんやん、その当時私よく内職したわ。最初にしたのが、キャップなんかの面取り。ところがこれ、ヤスリで磨いてやってたもんだから、そこらじゅうが粉だらけになっちゃって。そこへまだ小さい娘がいるから何でも口に入れるじゃない、ああ、こりゃ子供の体によくないと思って止めて。

次はワコールのスリッパの縁を切る仕事。だけど高いスリッパはすごく繊細やもんで、心を落ち着けてやらないと失敗するの。だから子供が寝てからやるんだけど、そうすると私が寝る時間ないやん。これはあかんと思って、たいしたお金にならないうちに止めて。

そのうちに、近くにタオル工場があったもんで、タオル縫ってくれて頼まれたの。私ミシンだけは好きで、お嫁に行く時それだけは持ってきてたから。ミシンに工業用の動力付けてもらったこともあって、私は縫うのがすごく早かったから、急ぎの注文が入るとすぐに私のところへ持ってきた。もう晩御飯も何も作る暇なしでずうっと（作業をした）。そうすると家の中が綿ボコリでえらいことになって。これも子供によくない、喉をやられると思って止めた。

上の子はもう五、六歳だから保育園に行ってるけど、下の子はまだ小

さいから始終私の傍におるわけでしょ、加奈子が今体があまり丈夫じゃないのはその辺に原因があると思う。そう思うと済まなく感じる。

吉田の家は元武士だったからこの間に売り食いしてたわ。お膳の一式とか家紋入りの提灯とかなんだけど、これが骨董品で道具屋がいい値段で引き取ってくれたわ。あと、嫁いで来た時に吉田のおじいさんにももらった江戸時代の金貨も全部売った。

だけどこのまま食いつないでいてもいずれ駄目になる、主人に「土方でもいいから一緒にやろう、二人で働いたらもう少し暮らしは楽になるよ」って言ったら、「やれない、俺はそんなとこまで落ちれない」って言ったの。もう落ちるところまで落ちてるのに（笑）。だから（主人は）表面を、なりふりを見て（モノを）言う人。「やるんなら（家の近所で土方の格好を見られるのは体裁が悪いから）、お前がスーツ着て出勤するみたいな格好をして大阪市内まで行って、（お前が土方を）やれ」って。（それを聞いた時）もうこの人駄目だと思った。

そうこうしてる内に、もっと致命的やったのがネ、（これは言いたくなかったンやけど）「背に腹かえられないから身体売って来い」って言われたの。そこまで追い詰められてたの。それから離婚することを考え始めた。いくら二人も子供なした仲でも。じゃなかったら（子供がいなかったら）もっと早くに別れられたンやけど、やっぱり好きで一緒になった人やかからっていうのと、子供の親やかからっての、なかなか踏ん切りつかなかったけれど、それから（離婚の）計画を練りだしたの、三年かけて。

それで離婚するためにはまず、外へ出なきゃいけないと思って、安田生命へ働きに行ったの。内職では追いつかない（お金が貯められない）から。でも自分が働きに出るためには、加奈子を守りさんに預けなきゃ

ならない。今は（保育園は）赤ちゃんから預かってくれるけど、その時はできなかったから。

だからものすごい、子供が小さい時は大変やった。一番もがいたネ、生活に対して。それで私が内職で稼いでも、全部主人が自分の飲み代にするんだわ。毎日お酒飲みし、毎日人が（遊びに）来るの。生酒を一ケース頼む（酒屋に注文する）ンやけど、一晩でないンやで。それで（主人は友達に）いい顔するの。今思うと寂しかったンやろね。ぼっちゃんやろ、お金がなくてもいいカッコしたいの。皆が野球したい、でもユニホームがないって時も、全部主人が作ってやってたもん。そりゃあ見てる間に家は駄目になるって。稼ぐに追いつく貧乏はないって言うけど、使うほうが多いんだもん。私あんなの飲み代稼ぐために嫁に来たんじゃないって言ったもん。

こんな中でも生活保護は絶対受けたらあかんと思った。主人はおるンやし、そんな恥ずかしいことはできないって言う考えやった。

⑤ 世間知に長けた男との出会い（一九六六～六九年）

それで安田生命に（働きに）行くンやけど、安田生命の三ヶ月の保証金が一万二千元。一ヶ月の子守り代が一万二千元。でも三ヶ月我慢すれば成績上がると思ってがんばった。

そしたらさあ、見てるうちに（営業成績が）トップになったの。それで（トップになった理由というの）三ヶ月過ぎた頃に、助けてくれた男の人がいたの。それがひとつの罨やったんけどネ。でも裏をもつかむって（気持ちの）時だったから、その時に助けてくれたお金ってのはすごく助かったわ。私はその人に二四歳の時から狙われてたらしいンさ。一六年上の人で、近所のおじさんだった。そのおじさんが、私が安田生命

行く時になぜだか同じバスに乗ってくるの。毎日県庁に用事があった。それであんまりしつこいから、ちょっとバスを遅らせたの。そしたら待つてはんねん、次のバスで。今でいうストーカーかなア。

私その人に会っているんなこと教わった。（後からひどい目に会ったから）悔しかったけど、やがては（後になって）人生勉強してもらったなアと思った。だからすぐお金も取られたけど、高い月謝払ったけど、それも私の人生にとってはプラスになった。子供たちには迷惑かけたけど。二面性のある人だったから、私の前では子供たちを可愛がってくれてたから長い間（子供たちがいじめられていたことを）知らなかった。特に下の子がいじめられてたみたい。

その人に家を出る（吉田と離婚する）までの三年間と、後の一年はすごく金銭的に助けてもらったね。私三年離婚を我慢してたでしヨ。お金を取られるようになったのはそれから（離婚した後）の話。その人はお金を私から持っていくのが上手だったよ、知恵者だから。「こうこうで入るはずのお金が入らなんだ、ちょっと貸してくれ」ってくるの。

それで（安田生命に勤め始めたころ）朝礼なんかがあっている打ち合わせしていると電話がかかってくるようになってさ、「喫茶店で待ってるからお茶飲みにいっちゃいヨ、お友達も誘って」って。セールスだから朝早くから訪問できないやん。だからどうしても喫茶店で時間つぶす訳だけど、毎日だと喫茶店代も馬鹿にならない。奢ってやるって人がいるとみんな女だからはいはい行くやん、同期入社した人なんか連れて。皆も喜んでついていくし。それでご飯まで奢ってくれる。だから私「吉田さん、大丈夫あの人？ 私らご馳走になってあんた後でどうもならへん？」て聞かれたもン。「ちょっとあんた危ないで、あの人。狙われとるで」って。

それで、一年八ヶ月で辞めるんだ、安田生命を。私一番トップの時に辞めたんだけど続かんと思ったのは、その頃、今でもあると思うけど「一回ホテル付き合ってくれたら（保険に）入るワ」っての（そういうお客）がいっぱいおるの。特に県庁。お役所とか入る（保険の営業に行く）と上の方ほどそうやで。私はもうここには長くおれないと思って。私前にお医者さんにおる時にもそういう事柄で辞めて、今度また身体売って来いって言われてこの人（吉田清）とは別れなあかんと思ってたのに、またそういうことが付きまとうわけ。女であるが故だわネエ。けど、もうそういうことに敏感になってきとるやん。汚らわしい、こんなもの欲しそうなところにはおれやん、子供に対して申し訳ない、っていうの（気持ち）が出てくる。他人は、「あの人は成績上げてるけどそういうので上げてる」っていう目で見えるンやもん。

それで後から分ったンやけど、その一六歳上の人（池田直正）は戦時中共同通信（社）におった人だったの。それで知り合いが地方の月刊誌みたいなのを出して、池田は（その顧問のようなことをしていたため）県庁の中のことをよく知ってたの。だから、係長以上に上がっていく（出世していく）人たちは肩をポンポンって叩かれるとホコリが出るから怖い。下手なことすると（雑誌に）何を書かれるかわからないから。（池田は）怖いもンなしだよ。だから知事さんでも、こうヨ（お辞儀する）。それで言われたの、「俺の秘書をやれ、そうすれば安田生命で働いてるくらいのお金はあげられるよ」って。どうせストーカーみたいに付け狙われるんならそうしてしまえって思って（池田の「秘書」になった）。そうするとその代償に身体つながりができてくるヨね。それは後やけど。ここで甘えてしまうた結果やね。その関係が四年間続く。

池田は頭がいいの、もうすぐく頭がよかった。頭がよかったから詐欺

にはならんけど、詐欺寸前やわな。法律には引っかからんだけで。

池田は相当辛辣なこと書いてた時代があったみたいで、選挙の時でもなんでも（雑誌で）叩いて一人の知事さんを駄目にしたぐらいだから、皆池田が怖かった。その後自分がペンを折る（もう書かないと約束する）代わりに一年間なら一年間、食べていけるようにしてくれという契約を結んだの。その代わり一切暴露記事は出さない。だから知恵者だよ。何にも書かずにだよ。毎月どこからでも（どこからか）お金が（出てくる）。

「ヨオッ」って（県庁やその出先機関に）行くと、課長さんが引き出しから用意してあった封筒を出すンや。そうすると領収書を書いて、「ところですね、彼女（たか子のこと）今私の下で勉強してるんだけど、これからもこの子を連れてきますのでよろしく」って言うの。池田が一万もらうと私は三〇〇〇円くらいやけど、それでも一日回って御覧なさい、大分（の金額）になンやで。確かにそのお金は生活費にしたけど、池田からもらってるわけじゃないから、援助じゃない。その人の収入からもらってるわけじゃないから。でもその道を作ってくれた。その代わり、そこら中歩いた。いっぱいあるンやもの、その（県庁の）出先が。B市ならB市の出張所におる人たちはいつ本部（本庁）へ帰れるかと思ってニュース（情報）が欲しい、そうすると池田が「次は君は何々の課だよ」とか「このレベルにいけるよ」とか言うの。そうするとそれが当たるんだ。だから池田は勉強もしてるンよ。情報をちゃんとキャッチして、書かないだけで。だからお金が出るの、何十年も。その意味ではすごく勉強させてもらった。

その時に言われたネ、「君は小さい時から学問つけてやりたかったネ」って。「学校行っなくてこんな伸びていくのに、もし行ったら僕

は君に及ばなんだと思うよ」って言われたヨ。飲み込みが早いって。

やがて池田は、男と女の関係になった時からすごくヤキモチを焼くようになる。そりゃ（私は）一六歳下で水商売の世界へ入っていくんだから、その後。「俺をだまして浮気ができたら大したもンや」って言わはったよ（笑）。

やがてそれをするんだ、私。最後池田と別れる時に「ようも、ようも騙してくれたな」って言わはったから、「俺を騙せたら大した女だって教えていただいたのはあなたです」って言った。

この人はちょっと前に八二歳で亡くなったンかな。そりゃ大事にしたよ、私を。電車でもバスでも満員だと私をパッと囲むんだもん、私に窮屈な思いをさせないように。あと、タバコに火をつけてヒョイとくれるしね。私がそろそろ欲しいなと思ったらくれた。お風呂から上がってるとくれるし、冬だとお湯に浸かってる時にくれとった。それで夏ならカルピス入れてお風呂でゆっくり飲みなさいってくれるし。それでお風呂から出る頃にはバスタオル広げて待ってんの、入り口で。あんまり大事大事にされたから、それから逃れるのが大変やった。（池田と別かれるのに）一〇年かかったよ。でもお金というもので私は尽くし返してる。四年間助けて貰ったからっていう気持ちがあるさしたんでもある。だけど、子供たちは私が好きな人だから一緒にいるんだろうと思って我慢してた時代があるの。

⑥ 生活との闘い（一九六九〜七三年）

それで、（話が前後するけど）主人（吉田）は私が安田生命に勤めるようになってからどんどん酒乱になってきて。だけど私は保険の仕事で月末は大変でしょう、ノルマがあるから。それで帰りが夜遅くなるの

よね。そうすると主人が、「どこで浮気してきたァ——！」って言うようになったンさ。ヤキモチがどんどんひどくなって、一五分で私がお買い物にいけるところへ三〇分かったら、裸に剥いて身体検査する人やった。もうそこまでいっちゃった。そら、（買い物に行けば）友達とも会うから立ち話したら一五分くらいすぐじゃない、何で裸に剥かれンならん。

それでこっちは出歩くからどんどん華やかになっていくじゃない。一方主人は引きこもるから余計嫉妬するンでしょう。私は外で稼いでくるからこの頃から生活が向上してくるの。今までは八百屋で通いでしか買えなかったのに、ちょっとづつ変わって来るじゃない。それと、主人は私が外へ出たら稼いでくる女だっていうのをよく知ってたわ。女の人があんまり働かなかった時代でも、ちょっと私は異端やったから。そろそろオバァチャンに鍛えられてきとった（育った）から（笑）、誰が見ても力強さ感じるやろし。

それで別れてくれて私が言うと、慰謝料もらったら別れたるって、主人。私が一人だとう稼ぐ女だって知ってるから（そういう条件を出した）。でも暮らしていけなかったから離婚するわけで、慰謝料なんか払えるわけがない。別れたらどのくらい稼げるかはその時にならないと解らないから口約束できへん。それで家を出るって決心した時に離婚届に判を押して貰ったの、五、六枚役所からもらってきて。

そしてある日「今だ」って時に出て行ったンやけど、あの日は辛かったな。主人を送り出しといて、自分も出勤するふりをしてコソッと戻って。出て行くときに持っていくものをメモできなかった（ハンドバッグの中を見られるから）。もうそういう状態になってた。筆筒なんかも見られるし、とにかく証拠を残せなかった。もう主人がいつ帰ってくるか

分からないからもう気が気じゃなかった。だから持つものも持たずに出て行った。

頭で考えてるものってね、そういう時はパニックになって考えがきちり収まっているはずが訳分からンくなってくるの。もう何べんも頭の中でおさらいしてるはずなのに。子供のものだけはお布団にしても何にしてもちゃんと持って来れたけど、自分のものは何にもなし。それとね、あァこの家に男一人になるンやなと思ったら、ストーブも置いて行こう、炊飯器も置いて行こう、私はお鍋でご飯も炊けるからと思って。それで人目もあるから何々運送って書いてない無名のトラックを知り合いから借りて、荷物を積んで。

ご近所の人に「どこ行くの？」って聞かれたら「K市」って答えてた。それで（実際は）N市へ来たの。だって（嘘を言わなければ）迷惑かけるもの。実際後で主人が出刃包丁持って近所の人に尋ねて回ったって。それを後で聞いたの。

住民票を持っていったら（住民票を移したら）いっぺんに足がつく（吉田に居場所がばれる）でしょう。池田に相談したら彼が市役所をおさえてくれたので、主人が何回居場所を尋ねていても（市役所の人）口を割らなかつた。だけど学校はそうはいかんから、博美は半年ほど学校休んだ。結局池田がそれをきかけにして親子三人の家の中へ入り込むようになった。見知らぬ土地で一番心細い女の心の隙間にスコーンと入ってった。

それで新しく仕事をを見つけなならん。最初に勤めたのが「藤岡」という料亭。そこで仲居を始めたんだけど続かなかつた。一〇月に来てその年の一二月には辞めてたから、二ヶ月ばかり。

というのは子供のために働きに出たのに朝一一時に出勤して帰ってく

るの二時。お客さんと芸妓さんが宴会の後麻雀するんだもん。それが終わらないと帰れないから、もう二時にも三時にもなる。これでは子供を犠牲にするから駄目だなんて思ってた時にうちのアパートの真ん前の女の人が六時ごろ出てって一二時ごろには帰ってくるの。これはとって、「あなただという仕事？」って言ったたら「バー」って言うから、じゃあ、ちょっと見せてよってことになって、それでそのバーを見に行ったの。それで面接に行って、そのまま勤めることになった。バーの名前は「紫^{しおん}音」。

その面接の時にお茶じゃなくてビールが出てくるの。当時は「お茶を挽く（暇になる）」って言葉を嫌ってお茶を置かなかったのね。お店では絶対置かなかった。それでもお客さんによっては「俺はお茶を飲みたいって言うてるやろォ——！」ってわがまま言う人がある。そうするとカウンターの合図されて、私ら（従業員が）お寿司屋さんまでお茶をもらいに行ったことあるもん。絶対店は出してくれない。そういうお客さんはわがままを通したい人だから、何様って態度で店に来るんだもん。それでそういう人に限って店にたくさんお金使う人だわサ、何々建設の社長とか。

この時代はそういう人（お客）が多かって、ものすごく私らは下に見られてたね。金さえ払ったら私らはひざまずくと思われてたね。また、私らがそうすることによってお金使ってくれる。殿様にさしてあげればチップにもなるわね。言ったモン、マスターが。「たか子ちゃん腹立つやろ、なまじプライド持ってる腹立つヨ」って。「私は捨てたつもりなんですけど、でも悔しいものがありますね」って言ったら、マスターが「帰るときに『ありがたないような気がいたしやした』って言え」って教えて貰った。でもこれは滑らかに「ありがとうございました」って

聞こえるように言わなあかんから、はっきり発音する人は言っちゃいかんって（笑）。そういう裏の話がいっぱいあるの。

（紫苑では）自分の中で溜飲を下げる方法を見つけないことと、お客さんに対する気配り、その両方を教えて貰ったね。

私（たち）がよくやってたことは、まるっきりその筋の人っていうタイプの人が来ると、伝票にヤクザって書いておけないから八九三って書いておくのね。で、女の子が何気なしにカウンター入ってきた時に伝票を触って「ねっ？」って言うと、女の子は「はい、わかりました」って言うって接客に行くのね。目配せをすると、そういう人ってのは目ざといからすぐわかる。何でって言うとなんという人はピリピリしてるわけだから、雰囲気。自分だけが疎外者だと思って。本当は皆と打ち解けたいの、寂しいの。だから同じような会話をするとものすごい喜んでくれる。そんな感じでここ（紫苑）では二年働いた。

それから「ロダン」ってクラブへかわった。ここでは一年三ヶ月くらい。「藤岡」から始まって「ロダン」を辞めるまでの間に二百万貯めた。その代わり朝からでも仕事に行きとった。

当時（は）コンパニオンというものがなかったから、ホテルで立食パーティとかあると、このクラブからは何人って（接待役の）募集があるの。どこでも行ったから、C市に朝七時集合っていうのもあった。（このころ、たか子の家からC市まで電車で二時間かかったから）朝の七時に行くというところは美容院にもっと早く行かなならんでしょ。真夏は絹の着物着て汗かいて行ったわよ。それで朝早く美容師さんを起こすんだから、二千元払うところをチップ入れて五千円払った。

だからお金が（目の前を）行き交うわね。お金の感覚なくなるよ。入るのも入るけど出る額も多い。そらァ、派手なもんやった。だから皆

（水商売の人は）ビツとしてた。草履でもその当時で二、三万の物履いてたんだから。今の（この店の）二階の部屋なんか着物で埋まってるよ。だから（収入を）全部そういうものにつぎ込んだもんね。今からはちょっと考えられやん。

子供らがたまに私を訪ねて店に来て、ここは私たちの来る世界じゃないって思ったって言うもん。来てはいけないところだって思ったって。そうなるともう（子供たちには）お母さんじゃないわね。だから「花街の母」って歌があんねん（笑）。

「ロダン」を辞めてから少しの間他のクラブへスカウトされて行ったの。そこは昔お触り（風俗営業）で有名なところだったのを大々的にクラブ（「マスカレード」という名前の店だった）に変えられたの。それがS駅の前にできて、当時の盛り場から離れたところにできたんだから立地条件としてもまずいところなのね。ましてや人から陰口言われるような経営してた所がクラブになる。その時に支配人から私に話が来たの。「たか子ちゃん、来てくれへんか」って。大々的にやりたいから主だった人（接客の中心になる人）が来てくれないと、ちょっとやそつとじゃイメージ変えられないって。

そういうことで行ったんだけど、私の腹の中には、これから自分がお店をやるのに、自分に対してお客さんが立地条件や評判が悪いところへ何人来てくれるかな（それを確かめたい）っていう気持ちがあったの。私がかこ（新しい店）へ移ったからって言ったらどのくらいついて来てくれるかって。だからそこへは二ヶ月しかいなかった（笑）。

⑦ クラブのオーナーとなる（一九七三〜七六年）

そして昭和四九年の六月に（自分の）店を出したんだ。三九歳の時。

いつまでも雇われでホステスしてたら子供達に申し訳ないって気持ちがあったし、どうせやるんならこの世界で上り詰めたという気持ちがあった。それは三五歳で水商売を始めた時からそう思ってた。

一文無しでN市へ来てから（店を出すまで）丸四年経ってないよ。生活がどんどん変わっていったから、子供たちもめまぐるしかったと思うよ。

この期間は短かったけど色んなこと覚えたね。私中学校まともに出てないでしょう。だからお客さんの会話の中にわからない言葉が出てきたら、その言葉を覚えておいて帰ってから辞書をひいた。それで次の日その言葉を必ず使ってお客さんと）会話するの。そうしないと覚えられないから。もう捨てちゃったけど、その当時私が使ってた辞書は（あんまり使用したもんだから）ボロボロやったネ。お金は稼がなあかん、身につけること（勉強）はせないかん、（その二つを）同時進行で考えてくから（大変だった）。

私「紫音」にいた時から建設省や県庁のお客さんをお得意さんに持つてて、その人たちが私のそういうところを買ってくれた。やがては、私が「ロダン」に行ったらその人たちも移って来てくれるし、自分の店出してもついて来てくれて、結局は私の店のお客さんになっていった。

最初に始めた（自分の店）のは、ミニクラブ。小さい店だけど女の子が五人も六人もおるからその分（も）稼がなあかん。だから食べ物もいっぱい出しとったし、チーズフォンデュなんかも出してた。あと、歌も歌うし習ってもないのに踊りも踊った。後に日本舞踊は趣味で習うことになるけどね。稼ぐ当ではお客さんからもらうチップだったから何でもやったね。

私の店のふたつ隣がヤクザが経営してる店で人（お客）があんまり寄

り付かないところやったんだけど、私にしてみたらそんなことは言われん。その分安いから、家賃が。ヤクザが近くで店出してるって事は最初から分かってて借りてるよ。どっちみち店を出したったらヤクザはくるンやもん。今は少ないけど当時はそれくらいヤクザは多かった。

その当時営業権だけで二〇〇万いった（必要だった）。五年の間に次々と（ヤクザに）つぶされて、そこに店を出したのは私で六人目だったの。で、電話も付いてないし細々したものにたくさんお金使ったわ。だから三—四〇〇万はすぐなくなるね。そうなる子供もいるし意地でも頑張らなきゃならない。自分が諦めたら子供まで駄目になってしまう。今から考えたら、それで頑張れた。お母さんがホステスっていうと子供が（学校で）肩身の狭い思いをしてるのは、もう目に見えてたから。

あの当時まだまだイジメがあったみたいやでね。子供が行ってた学校は片親でお母さんがホステスしてる子が割りと多かったんだけど、たまにそうでない子がいると（母親がホステスをしている子を）苛める。だからそういうお母さんたちは学校の名簿に「無職」って書いてたわ。

「お母ちゃんだけなんでホステスって書くの？」って聞かれたもん、子供に。私は「（ホステスをしていることは）何にも恥ずかしいことはないよ。これで生活たててんねんヨ（たててるんだよ）」って言った。生活保護を受けてるわけじゃないからね。

自分で店を始めて四年目で店を大改装したの。家が一軒建つくらいのお金かけた（笑）。（元の店は）ボロボロやったもん。天井も総ガラス張りにして。でも怖かったわア、地震がおきてガラス割れたら首なくなるなと思った（笑）。あと、床は一〇〇円玉が落ちてても分からんぐらい毛足の長い絨毯ひいて。だからお客さんがそのままどうぞって言うのに靴脱ごうとするの。あと女の子には跪いてお客さんに挨拶させてた。それ

もウリだったネ。やっぱりこう、（こうした工夫をすれば、お客さんは）殿様気分になるよね。

そうこうしてるうちに、今の主人（藤井厚生）と恋愛関係になってきたの。ことの起こりは藤井さん奥さんと別れるのに悩んでて、兄弟にも言えず親にも言えずで一人で悶々と悩んでいた時に、「ママさんちよと相談に乗ってくれへん？」って言われたのが始まりやったん。それでだんだんと（二人の会話が）中まで入るようになって、お互いに心も開くようになる。最初は憧れのお姉さん（藤井は一五歳年下）やったのが、私事で話してるうちに「幼いンやなア、この人」って思われたみたい。

それで交際してる時に、私がいっぺん富山に帰りたいって言ったの。富山には母の位牌があるから持って帰ってお祀りしたいって。一人で行くつもりやったけど藤井さんが「僕も富山の建築物が見たいから一緒に行きたい」ってなったん。それがもう婚前旅行みたいになったん。

ところがこれも運命やな、池田にばれた。何で分かったかっていったら、S 駅から電車に乗って行く時に池田の知り合いが見てたの。私が池田の女だって知ってたんだろね。富山駅で降りるとこまで一緒やったって（それを確認したと）言うンやもん。常に私（たち）の後ろにいたンやって。それで帰ってきてから池田に「彼女、里帰りだったんですか？」って。池田が「あア、そうですヨ、母親の位牌を取りに」って言ったの。そこまでは（ツジツマが）おうとる（あってる）。けど、そのあと「あア、それでご親戚の方と一緒にな？」と、こう来た。それで「えっ？」って言った。「いやア、若い男の人と一緒にしたよ、親しそうでしたよ」って言うのから分かって池田が調べ出した。店の台帳から調べ出した。勘が働く人やですぐ（二人の関係が）分かったみたい。

それで私が出かけている間にさア、陰険なことするの。藤井さんのお

母さんの方へ電話入れるの。「おまえなァ、おまえンとこの息子が何やツンのかわかつツンのか、他人の女に手エ出しやがって。それが大手の会社の社員のやることか！」って。

それで子供たちが（池田の電話を）聞いててさァ、「陰険！」って、一言言うたンやて。やっとなることが陰険やて。おかあちゃんのおる場所ですらいいやんって。おかあちゃんがおりんようになったらそんなことするの陰険やて。それまで耐えて耐えておったのが爆発したみたいなンさ、二人が。それまでは威圧感があって（子供は）池田に何にも言えなんだ。

私の前では池田は子供を可愛がるから、それまで（苛めているのが）分からなかった。それから一気に何もかもが出てきたンやもん。だから池田も破れかぶれになったンやな。これは（私に）逃げられたらかなわんと思って必死になった。「昨日はタクシーで帰った、今日はどこやらの車で帰った、俺は後ろから付いて来たでよう知っとる」って言うようになった。おうてる（当ってる）ところもあるし間違ってるところもあるしで、あァ、これはハツタリやて（私は思った）。俺はこんだけ執念深くおまえを追っかけて歩いとんのヤ、だから（隠しても）分かるヨっていうことなンやろうな。

私（たか子と藤井）の逢引つてのは店ではできへンやん、店終わってからだから夜中やん、そのころ藤井さんはD市で仕事をしていたから、そこから店に通ってた。だから店が終わってから二人でD市の方へ行くの、話す時間ないから。D市で泊まるホテル決まっていたわ。そこで藤井さん寝やなあかんヤ。そこへ着くまで話して、寝て、朝になったら最寄の駅まで一緒に行くの。その間また話できるから。そして私がD市からまた家帰ってくるの。そういうのが続いていたのね。

そしたらある日、工事現場から落ちたの、藤井さん。まっさかさまに頭から落ちて入院したの。足場のビスが外れておったのを知らなくて歩いたんだって。下請けの人の連絡ミスやったンやけどね。頭から落ちたもンだから、どこの病院もとって（入院させて）くれへん。救急車でぐるぐる回されて……。

それでその前の晩私のところへ電話かかることになってたんだけど、かかってこうへん（かかってこない）。店に私たちのことに好意的なコがおって、そのコが池田に何を聞かれても上手にかわしてくれてたンやけど、そのコと（電話がかかってこないことを）おかしい、おかしいって言ったのね。「ママさん、今日私出がけにまっさらな櫛の齒が折れたもンで嫌な日やなァって思ってたンやけど、何もなかったらいンやけど」って言うとなら、その翌日の昼頃に電話かかってきたん。藤井さんの上司からで、「藤井君とはどういうご関係ですか」って聞かれた。「本人は頭を打って面会謝絶状態ですけど、うわごとでここの電話番号を何度も言うもンだから」って。それですぐD市の病院まで行って。それでも身内じゃないから、どういう状態かてことを教えてくれない。身内の人に私がいきなり行って聞けるわけもないし。齒がゆい思いで帰ってきたね。状態が分からんてことはすごいこと（最悪のこと）想像するやん。

それで毎日D市まで通ってるうちに、私と藤井さんが付き合ってることとが彼の会社についてんにばれてしまった（笑）。逆にそれが良かった。藤井さんのお母さんも、私がこんな年上やのにさァ、私が面会に行った時に息子（藤井さん）が何とも言えんような顔をしたンやて。安心した顔を。それであァ、このコならって思ったンやて、私のことを。これが息子（藤井さん）が惚れとるコなンやていっぺんで分かったって。

だから（一緒になるって言った時に）何も反対がなかった。

⑧ 年下の男のと再婚（一九七七年）

それで私も寝不足やし、彼も寝不足やし、こんな生活続けてたら碌な事にならん、これは一か八かやらなあかんと思って、一緒になるのに着々と事を運んどった。ところが相手（池田）は大変な嫌がらせをする人でしょう、店を潰すの何のって言う。だから、あアいいですよって。「おたく（池田）が店つぶすンやったら、私は毎日県庁へ行って張り紙しますから、県民室の前で。あんたが破くソバから貼ったる、それを仕事にする」って言った②。

それから、池田が彼（藤井）にも嫌がらせを始めたの。お前を会社におられんようにしてやるって。それで彼（藤井）が上の人に、「こういうことで、こういう人が会社に殴り込みみたいに来ると思いますが、自分が会社における立場で必要がなかったらいつでもクビにしてください。平気でそれに甘んじます」って言ったの。そしたら案の定来たって！黒いサングラスかけて、ヤクザみたいに黒い上着肩にかけて。そういう人なんサ。そりや道歩いとったらヤクザがピョコンと頭下げるワ。それだけ風格があったし威圧感があった。それでも（藤井の）会社は何も言わへんかったよ。

私はそれで、ああ、この人（藤井）となら一緒になるって思った。そのとき上の子（博美）が高校生やってんけど「お母ちゃん、（藤井さんが）駆け落ちしようって言うんなら行こう。あの池田と別れるんなら私はどこまでもついて行ける」って言ったの。それまでは、いくら藤井さんに一緒になるうって言われても信用できなかった、情けないけど。だけどこういうアクシデントがいくらあっても突き抜けていこうとする、

その（藤井の）姿勢は、やっぱり本物やなって思えた。あア、一途な人やなって。普通は子供はでっかいわ、変な男が愛人でございっておるわ、やったら諦めるよ。それまでの男の人は皆諦めとったンやもん、俺の女になれって（一度は言っても）。会社の社長さんでも、店の一軒くらい出したるってのがようけ（たくさん）おったけど、「私にはこういうの（男）が付いてる。やがては会社に乗り込んでくる」って言うたら皆手え引いたもん。

そりや怖いヨ、ああいう新聞屋みたいな（雑誌ゴロ）は。法律すれすれの手を使ってくるンやもん、これほど始末の悪いモンないンやから。それでそうこうしてるうちに、私も名誉を傷つけられたンやで、あっちもズタズタにしたろと思って、池田が明日来るっていう前の晩に、藤井さんに泊まっていけって言って泊まらせて。そしてもう、池田が来るなっていう時間に、わたしは彼（藤井）には知らせないでベッドから降りて座ったの。そうしたら案の定、カチャカチャって合鍵の音がしたからホラ来たと思って（待っていた）。そしたら靴を（が）脱いであるのを見て、ダダダダーッて入ってきて「貴様たち——！」って始まったの、朝から。「お待ちしておりました」って言って、「こういう結果です」って（言っちゃった）。そしたら「ここへ座れ——！」ってなモンや。二人が寝とった現場を見せるンやで。

でももう、それしかなかった。確かに駆け落ちしてもいいとは思ってたけど、そんなことしたら彼（藤井）は今のような大手の会社には二度と勤められん。私のことで一生を棒に振らせてしまうやん。それは年上の女としては不甲斐ないやん。それなら私がやろう（決着を付けよう）と思った。膿出さなあかんで。破壊せんことには建設は成り立たんやん。いっぺんはもう、グジャグジャにせな。もうとにかく隠れて逃げては駄

目。

それで私がコーヒーいれたらナ、「何で三ついれるのヤ！」って言うから、「私ふたつにしとこうと思いました。私はこれから幸せになるンやで、あなた（池田）には飲ましたくないけど、こっち（藤井）には飲みたい」って言った。もうそういう風な（他人行儀な）言葉になってきて。最後には殴らせて（殴って）もらったし、一〇年間ようよう騙してもくれたし、あたらしい年月を（あなたのために浪費した）。だから勉強したと思って、高い月謝払ったと思って（お店を）全部くれてやるって言った。

私すっからかんになったもん。むこう（池田）は経理してたから、いくら有るか全部知ってるし。居心地良かったって、むこう（池田）は。だってむこうの家（池田の本妻宅）も私が養ってるようなもんだから。だから池田の奥さんは何も言わなかったの。奥さんも（私の家に）遊びに来るんだもん。

だから女ってね、一定の歳になったら食べていければ夫に愛人がおっても平気なんだよ。自分が潤沢やったら。だから昔から「女二人」っていうお芝居があるけど、本妻と妾がおおだ大店のうちに一緒に住めるのは、そういうところがあるからなの。心の葛藤はずっとあるけど、表向きは仲良く見せてるだけ。

それで「私が手切れ金払うから別れてください」って言った時にね、「そうか、なら別れてやる」って言われた。その時、すごく大きな人だったのが急にすごく小さな男に見えた。なンや、お金に負けるンやなァって思った。池田はその手切れ金で世界一周してるンやで。それで奥さんを連れて行かなかったんだから。そして別れてから「君と一緒になら、なお楽しかった」って手紙が来た時はぞっとした。なんかもう池田がみじ

めに思えた。

私は最初の主人はお坊っちゃん、男前も良かった。それで次は世の中にも女にも長けてる人で。だから三度目に一緒になる人は朴訥な人がいいって思ってた。本当朴訥よ、今の主人。上手（お世辞）言うわけじゃないし。それでええの。

男と女ってのはネ、若い時はお互い必要な時だけくっついて後は放ったらかしでいいの。ほんとに必要なのは歳取ってから。世の中が男として認めなくなる、女として認めなくなった時に二人が寄り添うの。それまでは放つときゃいいの。それまではお互いにしたいことがあるンやもん。私の最初の失敗は、男は男で女がこれ以上入ってきたら困るっていうところを乗り越えようとするし、女も男にここまで入って欲しくないっていうところを男が乗り越えようとする。それを愛だと思ってたこと。何もかも知っておりたからヤキモチも焼く。だから（今になって分かったことは）「ここまでいいけど、ここからは駄目」っていうところがあるの。結局そこ（に気づかなかったこと）が失敗。でもね、自分が惚れて一緒になると、お互いにそれ以上のことが知りなくなる。前のことが気になる。昨日のことが気になる。

今の主人（藤井）と一緒にになったのが四四歳の時。それで、今のお店「カナン」を始めたのが四九歳の時ね。

私ね、なんでも一〇年単位なのね。一〇年は我慢できるの。でも、一〇年経って状況が変わらなかつたら、もう何でも良くなる、我慢に我慢を重ねるから爆発する。矢でも鉄砲でも持ってこいって（気持ちに）なっちゃう（笑）。

そういえば、池田が最後に私と今の主人（藤井）に言ったことが、「この女はな、一〇年で男を変えるぞ」って。捨て台詞ね、最後の。だけ

ど後悔がないの私には。やるだけのことはやった後の結果だから、全然後ろ暗いところも何もない。だけど世間ではすぐ気ままな生活をするように思われる。そこ（表面的なこと）だけ聞くとね。男癖が悪くてどうもならん女を想像されるみたい（笑）。でもそれはそれでええやない（いいじゃない）、その人の感じ方なんだから。

第四章 結論 — 何が彼女をそうさせたか —

一 ふたつの特徴—その一「自助の精神」

藤井たか子の人生を見ると、彼女の「性格の柱」とも言うべきふたつの点に気づく。ひとつは「自助の精神」で、もうひとつは「独自の『正義』をとおすこと」である。

たか子の場合、「自助」とはすなわち、経済的に自立することであった。たか子がそれをはっきりでないとしても自覚するきっかけとなったのは、富山の「オバアチャン」の家での生活であった。母が療養と疎開を兼ねて富山の実家へ帰り、たか子は義父と名古屋で暮らしていたが、その義父も召集されてしまう。一人になったたか子は名古屋から富山へ母の実家を頼っていくのであるが、たか子を持っていたものは「ヤッカイモノが来た」という冷たい視線であった。数え年九歳の子供が、その日からたか子自身も言うように、映画「おしん」の主人公に勝るとも劣らない労働をしいられることになる。

都会から田舎へ、旧家の跡取娘から「おしん」へ。それだけでもたか子のそれまでの価値観は変わらざるを得ない。つまり肉親の愛情のなか何不自由なく育てられてきたので、「自分が欲しいと思うものは何でも与えられる」という境遇であったのが、「自分が欲しいと思ってでも与え

られない」ことでたか子の価値観が大きく変わっていくのである。

「ヤッカイモノ」の母、妹、自分が富山の家で暮らしていくためには、自分が三人分働かなければならなかった。学校へもろくに行かせてもらえず、まさに働きどおしであったといえる。しかし、生きるために必死で働かなくてはならないという状況が、否が応でもたか子に自立への自覚を促し、「自分は稼げる女である」という自信が芽生えるきっかけになっている。この経験によって初めてたか子の中に「自助の精神」が芽生えるわけだが、その後たか子が自助・自立していく過程を見ていこう。たか子が自助の精神を獲得していく上で、富山の「オバアチャン」の存在は大きな位置をしめる。たか子ら三人に一番辛くあたったのがこの「オバアチャン」であった。あまりにも辛くあたるので、見かねた近所の人がたしなめたこともあったと言う。しかし、「オバアチャン」は頑として聞き入れなかった。「オバアチャン」にしてみればふた親を失った女が一人で生きていくためには、人並み以上に働けなくてはならないという気持ちがあったに違いない。当時のことを振り返って、たか子自身「辛くあたられたが、一人で生きていけるように仕込んでもらったことを今は感謝している」と述べている。

たか子が精神的・経済的な自助・自立をはっきりと自覚したのは、神戸へ義父を頼っていった拒絶された時である。そのショックからたか子は自殺を試みるが死にきれず、「誰にも頼らず、一人で生きていけるよう」になろうと決意する。

義父と愚連隊に追われ、逃げるように神戸から大阪へ移ったたか子はそこでもさまざまな職を転々とする。そして吉田清と五年間の恋愛期間を経て結婚した後も、たか子は専業主婦にはならなかった。むしろ、ならなかったというよりは状況が彼女を「専業主婦にさせなかった」とい

える。タバコ屋を引き継ぎながら内職の幹旋業をし、アイスクリームのカップを貼る工場を建ててからは自ら社長となって働く。しかし、たか子が稼ぎをあげていくのと裏腹に、夫・清は働かなくなっていく。たか子は家計を助けるためにさらに内職に精を出す、結局吉田清との結婚生活は一〇年で破綻し、今度は子供二人を抱えて自活しなくてはならなくなる。

今までの中でもっとも印象的な時期はどこかという筆者（小川）の問いに、たか子は離婚後母子三人で生活をしてきた時期をあげた。全てを捨て、見知らぬ土地での再スタートであり、幼い子供が二人もいる。しかし、「自分が諦めたら子供まで駄目になってしまう」という一心で働いた。その甲斐があつて生活はどんどん向上し、やがては自分の店を持つようになる。

「働けば働くほど生活は豊かになり、自分の周辺の人（子供、妹等）も喜んでくれる」——たか子はごく幼いころにこのことを身をもって体験している。最初是否応なく働いたか子だが、藤井と再婚した後も（経済的な面から言えば、たか子が働く必要はない）飲食店「カナン」を経営し、六六歳になった今でも現役で働いている。

たか子にとって「働くこと」は、「経済的に自立する」ための手段だった。しかし、やがて「働くことそのもの」がたか子のアイデンティティを支えるものになっていったことに気づく。筆者（小川）は何度か「カナン」にお邪魔したことがあるが、いつでも生き生きと働いておられた。自助・自立を模索してきたたか子だが、今ではそれらとは関係なく、「働くこと」そのものが彼女の人生における意義、ひいては生きる意味になっていた。

二 ふたつの特徴—その二「独自の『正義』をとおすこと」

これについては①世間一般の「正義」と、②たか子のもっている独特の「正義」、ふたつの面から論じてみたい。

たか子の人生で①が現れる箇所については次の例を挙げてみる。

イ 吉田清の祖父に「（孫の清と）一緒になってくれ」と言われ気が進まなかったが、女手がなくて困るだろう（その直前に清の祖母、妹が相次いで死亡していた）と思い、清と結婚する

ロ 吉田清と離婚する際に、男の一人所帯になるのを心配して、炊飯器やストーブなどを置いていく

イ、ロはたか子がもともと持っていた義理や人情、もしくは義侠心によってなされたことではあるが、それはたか子自身が見ず知らずの他人（例 親代わりを申し出た警官、神戸を出ることを勧めた愚連隊の青年）に助けられてきたことに恩を感じたからこそ、なされたこともあるだろう。

このようにたか子には「世間」一般で言う正しいとされること、つまり①も備わっているが、その反面一度自分がこうと決めたらやり通す面を持っていて、それが②においては強く発揮されている。

そこには、その当時一般的であった「世間」の価値観（女は結婚して家を守るものである、女は二夫にまみえずといった）にとらわれず、自分の幸せは他人に決められ、与えられるものではなく自分で掴むものという生き方が見られる。それは「世間」の枠の中から見れば「過激」な行為に映るかも知れない。

イ 子供までもうけたのに、夫・清にいったん見切りをつけたら離婚に向かって計画を立て、実行に移したこと

ロ ヤクザを向こうに回して自分の店「オーロラ」を守りきったこと

ハ 池田と別れる時に、修羅場を覚悟で後の夫となる藤井を同席させたこと

などがその例である。

たか子が世間一般の価値観のみに重点を置いていないことを調査者が非常に強く感じたのは、渡辺雅子の生活史研究「ある女性祈禱師の生活史」の話者である山岡恵照さん（以下敬称略）のライフヒストリーとの比較においてである。

山岡恵照は明治四四年生まれの女性祈禱師で、（調査の行われた一九八八年当時に）満七七歳で京都府に住んでいた。恵照は昭和二八年に突発的な神懸りを体験し、その後「行」を積む中で、昭和三〇年には正光教祈禱所（仮名）を開設、現在に至るまで巫行にたずさわっている。

山岡恵照の性格には「やりかけたことは最後までやりぬく」という実行力がまず挙げられるが、「恥」に対する強い意識が働いており、それはすなわち「世間の物笑いにならぬよう」に行動することにつながっている。ここでいくつかその例を挙げてみる。

イ 夫は長男であるのに跡取りとして正当に評価されていず、自分から後ろ指をさされないように自己を律し、警察に対しても自分からとやかく言ったら親戚に顔向けができないと一言の愚痴もこぼさなかった

ロ 夫が職務の中で収賄をしないように監視していた

ハ 夫の浮気に対しても、離婚すれば子供の就職や縁談にさしさわるし、自分の名折れにもなると耐えぬいた

「世間の物笑いにならぬよう」にすることとは、「世間」の価値観にしたがって生きることであり、それは「自分がこうと決めた

ら他人に何と言われてもやりとおす」という個人の強烈な自我とは相容れないものである。恵照にとっては「世間」の価値観に従うことが「正義」であり、たか子にとっての「正義」とは世間の価値観を踏み越えてまでも自分が正しいと思ったことは貫き通すことであった。

このようにたか子と恵照はまるで正反対の価値観を持っているようであるが、ふたりともみずからの自立を模索し続けた女性であることは疑いようもない。幾度となく苦境に陥っても、自分がよりよく「生きる」ための努力は決して欠かさなかった。そこにふたりの共通点を見出すことができる。自立を模索していく過程の中で、それぞれの状況の違いによって、結果的に異なった「正義」を持つに到っただけである。

このふたりの女性はいちようど一世代ほど（山岡恵照は明治四四年生まれ、藤井たか子は昭和九生まれ）年齢が離れているが「世間」に対しての認識は大きく異なる。生活した場所も生まれた時代も異なる二者のキャラクターを同一線上で比較するにあたってはさまざまな意見があると思う。しかし、諸個人の中にある「正義」のありようや、その違いについて考察することは決して無益ではないと思う。

それでは、たか子が世間一般の「正義」とは別に独自の「正義」を持つに到ったのは何故だったのだろうか。それはたか子の今までの人生が放浪を主としていたからだと考えられる。

たか子は生まれてから再婚するまでの間、各地を転々としている。実にさまざまな場所に移動している。その意味で彼女は常に「旅人」であった。「旅人」とはつまり現地の人々からみれば「ヨソ者」であり、他人から多少の好意を受ける事はあっても、地縁・血縁に基づく「世話」を受ける事はできない。たか子は放浪の中でそれを無意識に感じ取り、ヨソ者意識を持ちつづけることによって必要以上に他人を頼ることをしな

かったのではないか。するといきおい、「自分は自分、他人は他人」という姿勢をとらざるを得ず、他人（＝世間）はたか子にとってあまり意味をもたなくなったのである。よって、世間一般の「正義」は彼女にとって意味をなさず、独自の「正義」が育まれることになる。

三 ふたつの特徴と妹の存在

一、二で藤井たか子の性格にみられるふたつの特徴についてそれぞれ論じてきたが、筆者にはこのふたつの特徴が互いに無関係だとは思えない。むしろこのふたつはたか子のなかでその根を同じくして育まれた特徴であるとは考えられないだろうか。

たか子はインタビューの最後にこんな言葉を残している。

（私には）後ろ暗いところも何もない。だけど世間ではすごく気ままな生活をするように思われる。（中略）でもそれはそれでええやない（いいじゃない）、その人の感じ方なんだから。

この言葉はたか子の「正義」のありようを端的に表している。自分ができる精一杯のことをしたのなら後悔はなく、その結果他人に悪く思われることがあっても甘んじて受ける、という意味に筆者にはうけ取れた。たか子は幼い頃から自助・自立の術を模索してきたが、それと同時に他人に頼る気持ちは捨ててきた。ひとりで生きていくということは（厳密にはひとりで生きていくことは不可能であるが）自分なりの指針（たか子の場合は『自分なりの「正義」をおすこと』が常に必要であったし、またそれが唯一の心のよりどころであったことは想像に難くない。たか子という人間のもつ、突出した一見別々の特徴は、実は彼女の精神

の奥深くでつながっていたのである。

さてここで筆者が着目したのは、妹・みち子の存在である。たか子の半生を見ていくと、常に誰かしらの面倒を見ていることに気づく。その対象はさまざまだが、特にたか子が長年にわたって面倒を見ているのは、この妹・みち子である。たか子は姉というよりむしろ「母」であるかのような愛情を注いでいる。それは博覧会に行くために、働いて必死に貯めたお金で二人分の遊興費を捻出したり、みち子の喜びそうなものを買って与えていることから分かるし、みち子が就職するまで実に一〇年以上にわたって仕送りを続けたことから分かる。

たか子は一見「アウトロー」に限りなく近い半生を送ってきている。吉田清の祖父に感心されるほど、いつグレても（完全なアウトローになっても）仕方がないと思われる境遇であった。しかしたか子は完全なアウトローにはならなかった。なぜたか子は完全な「アウトロー」にならなかったのか。その答えはこの姉妹の強い結びつきから説明できるであろう。

たか子が早くから経済的な自助・自立を求めたのはもちろん自分自身のためでもあったが、みち子に仕送りをするためという気持ちが強かったからであることは本論に非常によく現れている。また、二で述べたように彼女は放浪する過程で自助・自立を模索してきたので、他人（＝世間）の価値観はたか子にとってあまり意味をなさず、独自の「正義」を持つに到った。

結局、みち子の存在を通してたか子の性格の柱とも言うべきふたつの点、つまり「自助の精神」と「独自の『正義』」が形成されていたのである。そして一見「お荷物」に見えるみち子の存在こそがたか子を完全な「アウトロー」にさせない「歯止め」であった。

「自分からの仕送りを妹が何よりも喜んでくれる」——その一心で寝る間も惜しんで働いた結果、たか子は完全な「アウトロー」になるかもしれないなかったところを救われたのである。

四 「社会」をこえる「個人」

第二章において筆者は、個人の「存在感」が社会のそれに決して負けるものではないことを確信した、と記した。仮にある個人がその「存在感」の大きさという意味で、社会という巨大で、無数の「個人」を抱えこむものに打ち勝てるとすれば、自らが多大な犠牲を払ってでも、自らの守るべきものを手放さないことであると筆者は考えた。よって筆者が本論を書き進めていく過程はまた、個人が守りたいと思うものの正体を見きわめようとする過程でもあった。

藤井たか子のインタビューから筆者が受け取った答え、それは彼女の「独自の『正義』」の根底にある「良心」であった。

ここで筆者のいう「良心」は、通常使われている意味での良心とはやや異なる。良心とは一般に人間の持つ理性の一部であるが、筆者が言わんとする「良心」は理性によってのみ形作られるものではない。なぜなら理性は感情によって左右されないからである。

一般的の意味での良心によってなされる行為や判断ならば、他人の理解や評価を得ることはたやすい。それに対し、「良心」による行為・判断は、他人の理解や評価を得られない場合がある。むしろ非難されることの方が多いかも知れない。こうした「良心」を筆者なりに定義するならば、それは「ありとあらゆる『利』を度外視した、個人の感情の核のようなもの」のことである。

本論の主人公である藤井たか子は、歴史に名を残すこともない、無数

の一般市民のうちのひとりである。しかし彼女が語る半生は、筆者が調査を始める前に持っていた社会と個人に対する概念、すなわち「個人は社会の中で生かされている存在である」という考えをはるかに超えたものであった。

たか子にとって、彼女独自の「良心」を放棄することは「社会」の前に敗北することであり、心身ともにアウトローに成り下がることであったが、彼女の半生には何度となくその「良心」を放棄しかねない（彼女を取り巻く「社会」が作り出した）状況が出てくる。その中には「良心」に従うことと、死が隣り合わせであるという状況もあった。しかしその度に彼女は、「良心」を手放すことなく傷を負いながらも、危機的状況を乗り越えていく。その姿に筆者は「社会」を一瞬でも凌駕する、個人の「存在感」の凄さを見たのである。

注

(1) 本稿の執筆分担は、第一章が武笠、第二、三、四章が小川である。全体的な調整と表記の統一は武笠が行った。なお、小川執筆分は、平成一三年度の卒業論文として三重大学人文学部に提出された論文（題名は本稿と同一）を加筆訂正したものである。

(2) 池田は県庁に出入りして（雑誌ゴロまがいのことをして）金をもらうことを生業にしていた。そのため、県庁の人たちも池田の弱みが欲しい。たか子はそのことをよく知っていたため、このような発言をするにいった。

参考文献

中野卓編『口述の生活史——或る女の愛と呪いの日本近代——』お茶の水書房
一九七七年

中野卓『日系女性立川サエの生活史』御茶の水書房 一九八三年

渡辺雅子「ある女性祈禱師の生活史——巫者としての自立と人生の構成——」

『明治学院論叢 第三八二号 社会学・社会福祉学研究』七〇号 一九八五年

中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂 一九五五年